わたしたちがつくるユネスコ教育勧告
ー＜コンヴィヴィアル＞から開く14の扉ー

2025年１月11日（土）　聖心女子大学ブリット記念ホールにて

実行委員長
聖心女子大学教授
永田佳之さん

『私たちがつくるユネスコ教育勧告ー＜コンヴィヴィアル＞から開く14の扉ー』が2024年１月11日におこなわれました。オンライン含めて470人の申込みで、対面でも140人ほどが参加して下さいました。

日本国際理解教育学会と聖心女子大グローバル共生研究所を中心としたボランティアによる企画でしたので、至らない所が目立ったかもしれません。それでも登壇者の方々のお話が余りにも深く、会場の皆さんの頷きは半端でなかったです。

ユネスコ本部からビデオメッセージを送って下さったCecilia Barbierさん、基調講演の西野博之さん（フリースペースたまりば代表）、パネリストの住田昌治さん（湘南学園学園長）、孫美幸さん（文教大学国際学部准教授）、肥下彰男さん（大阪府立西成高等学校教諭）、有り難うございました！

後半は、ユネスコ教育勧告のエッセンスを学ぶワークショップ。出来たてホヤホヤのユネスコ教育勧告の14のエッセンスと42の問いかけからなるカードでグループ対話。100人以上でもなんとかグループワークが成立。高校生から文科省、こども家庭庁まで、マルチステークホルダーの集いが実現できました。

プログラム

- ビデオメッセージ
  Cecilia Barbierさん（グローバル・シティズンシップ教育・平和教育課課長）
- 基調講演　西野博之さん（フリースペースたまりば代表）
  対談　西野博之さん・永田佳之さん（聖心女子大学教授）
- バネルディスカッション
  住田昌治さん（湘南学園学園長）
  孫美幸さん（文教大学准教授）
  肥下彰男さん（大阪府立西成高等学校教論）
- カード型教材を使ったワークショップ
- 懇親会

ユネスコ本部からのビデオメッセージCecilia Barbierさん

基調講演

西野博之さん

／Hiroyuki Nishino

西野さんは、NPOフリースペースたまりばの理事長で「川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん」の前所長、現在は総合アドバイザーをされています。長年、不登校の子どもの居場所づくりにかかわってこられました。
元々は江戸っ子ですが、川を越えた川崎市の多摩川の川の近くで不登校の子どもたちの居場所づくりをはじめ、その名前を「たまりば」としました。
川崎市が子ども権利条例を子どももふくめた市民参加で制定し、子どもたちが活き活きと過ごせる場所を造ることになりました。そこで、「たまりば」も活動することになり、西野さんは、夢パークの所長を長年勤められました。夢パークは、国内はもとより、韓国、ドイツなど、海外からも視察団がひっきりなしです。西野さんは、不登校や居場所づくりに関する著書も複数ありますが、最近、子どもの権利条約に関する絵本の翻訳もされています。NPOたまりばは、夢パークの他、若者の就労支援や生活困窮者の支援など、幅広く活躍をしています。

基調講演後、
西野博之さんと
永田佳之による
対談

パネラー

住田昌治さん

／Masaharu Sumita

住田さんは、横浜市の小学校の校長先生をされていました。専門はバスケットボールで、日本最初のNBAプレーヤーである田臥勇太さんを小学校時代に教えたとききます。
小学校では、ESDの実践をホールスクールアプローチでおこなっています。様々な著作を出されています。著作の名前にもありますが、まさにカラフルな学校づくりをされてきました。
現在は、湘南学園の学園長をされています。湘南学園での幼稚園から高校までのユネスコスクールとしての新たな展開が期待されています。

パネラー

孫美幸さん

／Mihen Son

孫美幸さんは、多文化共生教育やホリスティック教育に関して多くの著作をされています。
新勧告にはホリスティックという言葉が何回か使われています。孫美幸さんの実践や研究には、
ホリスティックという言葉が実体化されています。
また、在日コリアンというライフヒストリーからみたユネスコ新教育勧告の意義は、
孫美幸さんならではの課題設定となりました。

パネラー

肥下彰男さん

／Akio Hige

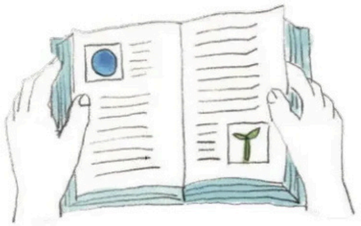
大阪府立西成高校で教えられています。担当は数学です。
パウロ・フレイレの意識化を通じた識字学習を、大学生のときにNGOのシャプラニールをつうじてバングラデシュで学び、それを応用した反貧困学習を西成高校で実践されました。反貧困学習は、NHKでも取り上げられたことで、全国でも有名になっています。最近は、世界でおそらく唯一であろう、靴作り部も展開されています。
ユネスコ新勧告はフレイレの影響が色濃いのですが、パウロ・フレイレの実践家として、肥下さんは日本の第一人者です。

パネルトーク

カード教材によるワークショップ

1. コモン・グッド

common
教育はみんなのもの
good
誰もが受けられるタカラモノ



Q1. 誰もが受けられるはずの教育を受けられない人々がいます。どんな人々でしょうか?
学校のほかで教育を実現している場には、どのようなところがありますか?
(裏に資料)

Q2. 近年、民間の情報産業や企業が公教育に大きな影響力をもち、サービス産業化されているという見方がなされるようになりました。あなたはこのことについてどう考えますか?

Q3. 近ごろ、教育は私的なのものという考え方が広まっているように見受けられます。教育を社会の「共通の財産」(common good)としていくためには、どうしたらよいのでしょうか?

ワークショップの
コーディネーターは
聖心女子大学学生の
雨宮充さんと岡本佳也さんでした。

参加者の感想から

「できなさ」「わからなさ」「おかしさ」に向きあうことこそが学びを深めるキーワード

西野さんの経験に裏打ちされた報告に、エンパワメントされました。
convivialの概念もさまざまな解釈ができることを確認できました。５０年ぶりの勧告改正に
こみ上げるものがあります。これまで排除されてきたものに向きあうこと…「できなさ」「わからなさ」
「おかしさ」に向きあうことこそが学びを深めるキーワードであるというお話に大いに共感・同意いた
します。形式的な浅い学びであるにもかかわらず、何でもかんでも主体的だの応答的だのと
言っている人たちの顔が浮かんできました。

共苦の底から共に生きる方へと歩み出す

孫美幸さんのお話がとても心に残りました。
ご自身の人生と研究の重なり、「当事者」と「研究者」というお立場でお話をされてあった姿に
とても感銘を受けました。
孫さんが「共苦の底から共に生きる方へと歩み出す」という思いにたどり着くまでどれだけの苦しみや
葛藤があったことだろう、と感じました。「虹のような人」という言葉がとても素敵でした。

参加者の感想から

校長が機嫌が悪いのは犯罪だ！

登壇者の皆様のお話がどれもとても参考になりました。音声が聞き取りにくかったのがちょっと残念でした。住田さんは、夢見る校長先生の映画で初めて拝見して「校長が機嫌が悪いのは犯罪だ！」がとても心に響き、子どもの権利条約フォーラム2024in東京にて当団体の分科会にて紹介したところ、この言葉が１番心に残ったという参加者もいました。孫さんのお話も資料を拝見しながらまた詳しく拝見したいです。西野さんのお話は何度も伺い、やっぱり心に届きますねえ。素敵です！

地域だからこそできるグローバル・シチズンシップとの繋げ方は

多様な世界がどれだけ豊かかということを学びました。
肥下先生の「今後、グローバル・シチズンシップを育む仕掛けが必要」とおっしゃっていたことが気になり、懇親会の時に質問させていただきました。その地域だからこそできるグローバル・シチズンシップとの繋げ方や気づき方を学ばせていただきました。

参加者の感想から

新たな対話が始まる

３のライツホルダーのカードでした。シンプルでわかりやすく、また問いはオープンでありながら自分自身の在り方を問うところから始まり、答えやすい＆アンラーンしやすいつくりだと思いました。とはいえ問いは難しくまた言いづらいものもあり、ワークショップの参加者や学習者によって問い方を変えたり、対話を深めるために調べ学習等を組み合わせたりする必要があるなと感じました。そうした実践的なものが積み重なったら、それをシェアする場があると新たな対話が始まるように思います。

子どもたちが自分を生きて他者と共に生きること

小学生の娘がおり、放課後に娘の友人たちが自宅に集まる機会が多いことから、「子どもたちが創る、放課後子どものあそび場」と題して家開きをしています。この活動をこれからさらに平和につながる場になるように、子どもたちが自分を生きて他者と共に生きることで平和な世界が築かれていくことに少しでもつながるような場所になるようにしていくためにどうしたら良いか、考えておりました。今回のカード型教材が示してくださった問いかけは、子どもたちと対話する際や子どもが集う場を今後も継続していく際に柱になる問いであると感じております。まだまだ小さくてひっそりとした活動ですが、一つの指針を得たことでエンパワーされました。ありがとうございました。

司会

風巻 浩さん
Hiroshi Kazamaki
前東京都立大学特任教授

阿部 裕子さん
Hiroko Abe
東京福祉大学専任講師

Thank You!

わたしたちがつくるユネスコ教育勧告ー＜コンヴィヴィアル＞から開く14の扉ー
実行委員会